

19世紀ニューヨーク市における一斉教授法の成立過程

杉村美佳

はじめに

本稿は、19世紀ニューヨーク市の初等教育機関において、一等級一教師の一斉教授法が成立する過程を明らかにすることを目的とする。

一斉教授法とは、一人の教師が一定数の生徒集団に対して、同一の教育内容を同一時間で教授する方法を意味する。一斉教授法の主な特質は、国民教育制度が成立し、普及していく過程に照応して普及した教授法であるという点にある。一斉教授法が普及するのは、19世紀初頭のイギリスにおけるベル（Bell, Andrew, 1753-1832）、およびランカスター（Lancaster, Joseph, 1778-1838）による助教制度（Monitorial system）⁽¹⁾の開発以降であるとされ⁽²⁾、大衆教育の発展、国民教育の制度化にともない、一人の教師が多数の子どもを一斉に教えることができる一斉教授法が広く採用され、教育方法の近代化が図られていった。

アメリカ合衆国（以下、アメリカと表記）における一斉教授法の成立に関する研究では、長年、「ランカスター・システムのモニター式教授＝一斉教授」⁽³⁾であると把握され⁽⁴⁾、日本の研究者も同様の見解を示していた⁽⁵⁾。しかしながら、1994年のジョンソン（Johnson, W. R.）の研究は、メリーランド州ボルティモア市の公立小学校を事例にとり、ランカスター・システムのモニター式教授と一斉教授とを明確に区別した上で、ランカスター・システムのモニター式教授が衰退した一大要因に、一斉教授法の登場が関わっていたとする視点を新たに提示した⁽⁶⁾。アメリカにおける一斉教授法の成立過程の全体像を明らかにするためには、ボルティモア以外の地域に関する事例研究の蓄積が必要であると考えられることから、筆者はこれまでの研究において、ミズーリ

州セントルイス市における一斉教授法の成立過程を明らかにした⁽⁷⁾。

こうした研究を受け本稿では、公立学校教育制度に初めてランカスター・システムを導入したニューヨーク市において、ランカスター・システムが普及し、変容して一斉教授法が成立するに至った要因や過程を考察する。

課題の解明にあたっては、ニューヨーク市無償学校協会によって作成された一次史料の他、ニューヨーク市の教育委員会の年報に基づいて著された同市の教育史に関する先行研究などを用いる。

なお、本稿で検討する一斉教授法とは、等級制の一斉教授法を指す。これは、19世紀後半までアメリカの初等教育において展開されていた方式であり、今日のような年齢に従って進級する学年制ではなく、試験による進級を原則とする等級制に立脚するものである。等級制は、今日の日本でも広く普及がみられる習熟度別学級編成の起点となったと考えられる。

I. 19世紀前半のニューヨーク市におけるランカスター・システムの受容と普及

イギリスで急激に普及したランカスター・システムがアメリカに導入されたのは、社会の発展と産業の進歩により、学校教育の必要性が急速に高まった1800年代初頭であった。アメリカにおけるランカスター・システムの急速な普及は、都市社会を変革しようという熱望から生じたとされる⁽⁸⁾。当時、低賃金と不潔な居住環境が労働者階級の生活をみじめにし、社会階層の格差は広がる一方であった。こうした貧富の格差の拡大は、当時アメリカの商業の中心地となりつつあったニューヨーク市において顕著であった。

このような状況のもと、1806年、ニューヨーク市無償学校協会（Free School Society of the City of New York）は、ランカスター・システムをアメリカで初めて本格的に採用した。当時のニューヨーク市には、慈善学校（Charity School）や小規模な私立学校が約90校あっ

た。しかし、親に資産がない者や、教会に属さない者には、学校教育を受ける機会がなかった⁽⁹⁾。そこで、いかなる宗教団体によっても教育を受ける機会のない、こうした貧しい子どもたちに教育を施すために、ニューヨーク市無償学校協会が結成されたのである。

この協会の設立者であるエディー (Eddy, Thomas) らはクエーカー教徒であり、いかなる宗教団体の教義をも教えることを極力避けていた。このような協会がランカスター・システムを導入したのは、システム自体の経済性や秩序正しさに加え、ランカスター自身がクエーカー教徒であり、特定の宗派の教義は教授しないという信念をもっていたからであった⁽¹⁰⁾。そこでエディーは秘書官のパーキンス (Perkins, Benjamin) とともにイギリスのランカスターの学校を訪問し、ランカスター・スクール開設の準備を始めた⁽¹¹⁾。

ニューヨーク市無償協会の設立は、こうしたエディーらの活動に負うところが大きい。その後の協会の発展に大きな影響を及ぼしたのは、協会の初代会長クリントン (De Witte Clinton) であった。クリントンは当時、非常に力のあるニューヨーク州知事であり、彼がこの協会の初代会長に就任したことは、協会が半ば公的な性質を有することを意味していたとされる⁽¹²⁾。

ニューヨーク市無償学校協会は、1825年には11のランカスター・スクールを運営し、約20000人の子どもたちを教育していた⁽¹³⁾。このうち数校は市の公立学校として認可され、市の教育補助金を受けるようになった。翌1826年には、ニューヨーク市無償学校協会からニューヨーク市公立学校協会 (Public School Society of the City of New York) へと改称し、市の教育補助金を独占するまでになった。同協会は、1840年代までランカスター・システムを堅持し、市内の私立学校を公立学校制度の中に組み込んでいった⁽¹⁴⁾。そして1853年に市の教育委員会が公立学校を管理するまで、ランカスター・システムは公立学校協会の公的な教育方式であり続けるのであった⁽¹⁵⁾。

II. 19世紀前半のニューヨーク市におけるランカスター・スクールの 実態と変容

本節では、主にレイガート（John Franklin Reigart）の研究に依拠し、ニューヨーク市のランカスター・スクールの一次史料を参考にしながら、①校舎と教室の設営 ②モニターの採用 ③等級編成 ④各教科の教育方法 ⑤ランカスター・システムの変容の要因という5つの側面から、ニューヨーク市におけるランカスター・システムの実態とその変容について検討する。

1. 校舎と教室の設営

ニューヨーク市無償学校協会によって設立されたランカスター・スクールには、一つの大教室と2～3の復唱用の小教室が備わっていた。大教室は、図1のように、縦の長さが幅の約2倍あった。大教室の前方には教壇と教卓があり、教卓の両脇にはモニター長のための小机が配置されていた。教室の中央には、1列10～20名ほどの生徒が着席できる机が配列され、生徒を図のようにIからVIIIまでの進度によって分けて着席させた。各列の側面には、図2のようなモニターのための机があった。また、生徒の機の両脇には通路があり、この通路では、読み方の授業の際に生徒が半円状に並んで掛図を読み上げた⁽¹⁶⁾。この形態はドラフト（Draft）と呼ばれていた。こうした校舎および教室の設営のありようは、イギリスのランカスター・システムをほぼそのまま継承している。

ニューヨーク市無償学校協会によって1809年に設立された第1（NO.1）ランカスター・スクールは、約500人の生徒が収容できた。1811年に建てられた第2（NO.2）ランカスター・スクールは、約300人を収容した。

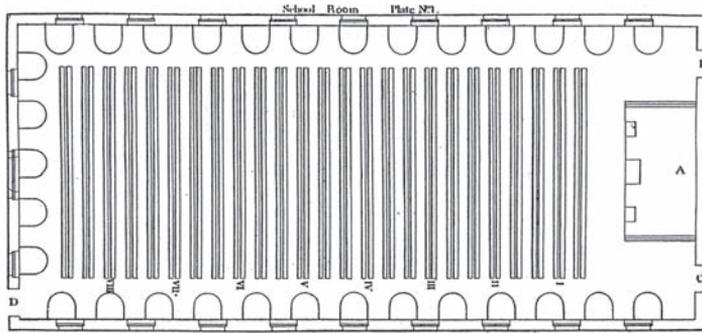
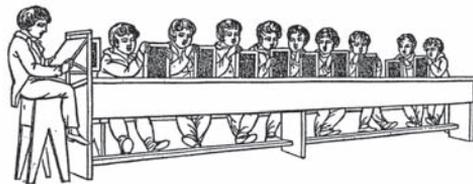


図1 1820年当時のニューヨーク市におけるランカスター・スクールの見取り図

(出典：Public School Society of New York, *Manual of the Lancasterian system, of teaching, reading, writing, arithmetic, and needle-work, as practiced in the schools of the Free-society, of New York, New York, The Society, 1820.*)



MONITOR'S SEAT AND DESK

図2 ニューヨーク市のランカスター・スクールにおけるモニターの椅子と机

(出典：Public School Society of New York, *Manual of the Lancasterian system, of teaching, reading, writing, arithmetic, and needle-work, as practiced in the schools of the Free-society, of New York, New York, The Society, 1820, p.11.*)

1830年頃になると、ニューヨーク市のランカスター・スクールの校舎に変容がみられるようになる。当時の典型的な校舎は3階建てとなり、1階は幼児用（Infant room）と初等教育用の教室（Primary room）、2階は女子のためのフロア、3階は男子のためのフロアとなった。1階の幼児用の教室は、後ろにいくにつれて床が高くなるギャラリ式で200人が着席できた。初等教育用の教室は中央に教壇があり、生徒の机はそれに向き合う形で並んでいた。2階と3階には、図3にあるように、大教室の他に復唱用の2、3の小教室が設置された。図3中のAは大教室、BとCは復唱用の教室、Dは入り口、Eは生徒用の机、Gは教壇、Hが教卓を示している。当時は一斉教授（simultaneous instruction）とモニター式教授（monitorial method）が並存していたようである⁽¹⁷⁾。

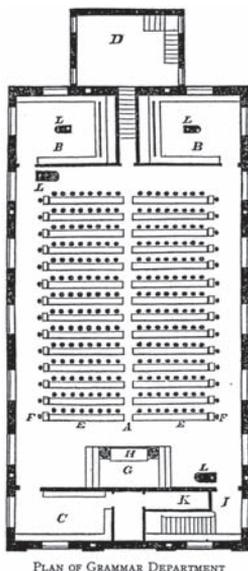


図3 1850年当時のニューヨーク市におけるランカスター・スクールの見取り図

(出典：Public School Society of New York, A Manual of the system of discipline & instruction for the schools of the Public School Society of New York, New York, Egbert&King, Printers, 1850, p.126.)

2. モニターの採用

ランカスター・システムの主な特徴は、一人の校長が年長で能力のある生徒をモニターとして無給で用い、校長の監督の下、モニターがそれぞれ10～20人程度の生徒を教えることにより、最少の費用で数百人もの生徒を教育することが可能であった点にある。

1820年にニューヨーク市無償学校協会によって作成されたランカスター・システムの「マニュアル」では、モニターの役割について13ページを割いて説明がなされている。この「マニュアル」によれば、1820年当時のモニターは、モニターを統括するモニター長（General Monitors）と補助のモニター（Subordinate Monitors）から構成されていた。これらのモニターはさらに読み方の授業担当のモニター（Monitor general of reading, Monitors of reading）、算術担当のモニター（Monitor general of arithmetic, Monitors of arithmetic）、綴り方担当のモニター（Monitor general of writing, Monitors of writing）などに分類されていた⁽¹⁸⁾。

ランカスター自身は、上述のようなモニター以外に、生徒の出欠席を調査するモニター、教材や学用品を管理するモニター、生徒の違反行為を調査して罰則にかけるモニターなど、多数のモニターを採用していた。すなわち、ニューヨーク市無償協会の「マニュアル」が規定したモニターの種類は、イギリスでランカスターが実践していたものよりも少なかったと考えられる。

それから30年後の1850年にニューヨーク市公立学校協会が発行したランカスター・システムの「マニュアル」には、モニターの役割について7ページしか記されていない⁽¹⁹⁾。これは、モニターの他に給料をも

らって校長を補佐する教師が採用されるようになり、モニターの仕事が軽減されたことによるようである。

このような趨勢を受け、1850年には、モニターは、教授を担当するモニター（Monitors of instruction）と学校運営を担当するモニター（Monitors of mechanical operation of the school）の2種類に大別されるようになった。教授担当のモニターは、さらに読み方の授業を統括するモニター（Monitor general of reading）、算術の授業を統括するモニター（Monitor general of arithmetic）など、教科ごとに分類されていた。しかし、1840年代以降、ニューヨーク市のランカスター・スクールは、しだいに全生徒を進度によって4つか5つの集団に分け、集団ごとに校長か補助教員が各教室（class room）で直接授業を授けるようになっていた。すなわち、教授担当のモニターといっても、当時は下級クラスの読み方、綴り方、算術などを教えるか、教授内容の復習を担当するに留まっていたとされる⁽²⁰⁾。

一方、学校運営担当のモニターには、教材の管理を担当するモニター（Book monitors）、学校の換気を担当するモニター（Monitors of ventilation）、暖房を担当するモニター（Fuel and fire monitors）などが導入されていたようである。

3. 等級編成

ランカスターは独自のシステムに、柔軟なクラス分けと進級のシステムを導入した。ニューヨーク市のランカスター・スクールでは、読み方と算術の教科ごとに生徒を学力によってクラス分けし、そのクラスで熟達すれば、いつでも進級を可能にした。同一クラスに属する生徒が多ければ、さらにそれをいくつかの小グループに分け、各グループをモニターが担当した。1848年のニューヨーク市公立学校協会の年報によると、読み方は第1クラスから第9クラスまでの9つの等級で編成され、第1クラスではアルファベットを学び、第9クラスでは最も高度な読み方を学んだようである⁽²¹⁾。一方、1848年までのランカスター・スクー

ルの算術のクラスは、8等級に分けられていた。

4. 各教科の教育方法

(1) 読み方

次に、教科ごとの授業方法の詳細をさらに検討してみよう。まず、1820年当時の「読み方」の授業では、全生徒は8つのクラスに分けられる。最下級の第1クラスではアルファベットの読み方、綴り方、第2クラスは2文字からなる単語と音節の綴り方、第3クラスは3文字の単語と音節の綴り方、第4クラスは4文字の単語と音節の綴り方、第5クラスは1音節の単語の読み方、第6クラスは2音節の単語の読み方、第7クラスと第8クラスでは聖書の読み方を学んだ⁽²²⁾。なお、このクラス編成は、ランカスターがイギリスで実践していたものをほぼそのまま踏襲していると考えられる。

たとえば、第1クラスのアルファベットの教授では、生徒は各列に座り、壁に掲げてある文字の記された厚紙を見ながら、モニターが読み上げた文字を砂板に書き写す。モニターは素早く砂板に書かれた文字を調べる。また、生徒たちを机の脇に立たせて半円状に並ばせ、モニターが掛図の中の指した文字を読ませる。この場合、第1クラスの首席の生徒に最初に答えさせ、もしその生徒が間違っただけの場合には、生徒は位置を移動し、次の生徒が答えた⁽²³⁾。正答した生徒はクラスの首席の位置を獲得した。

このように、ランカスター・スクールの読み方の授業では、「読み方」と「書き方」が同時に教えられていた。この授業では、生徒はモニターに個別に質問され、答えの正否によって席を移動した。つまり、教授の基本は個別教授の域を出ていなかったと考えられる。

その30年後の1850年のニューヨーク市公立学校協会の「マニュアル」によると、補助教員が登場し、砂板の代わりに石盤が用いられるようになったが、これら以外には、1820年とほぼ同様の教育方法が用いられていたようである。すなわち、補助教員かモニター長が文字を読み

上げ、生徒はその文字を石盤に書き写し、その後教員によって指示された文字を発音し、読み上げるといった方法が採られていた。この方式は、ランカスター・システムのドラフトの形態で行なわれた⁽²⁴⁾。

(2) 書き取り

「書き取り」は、初期のランカスター・スクールでは、「読み方」、「書き方」、「算術」を教える際に同時に実施された。「書き取り」の評価は、ドラフトでのモニターの質問による試験によって行なわれた。1850年のランカスター・スクールでは、「書き取り」に1時間半が割かれた。また、「書き取り」の時間は、生徒の規律を訓練する最良の時間（most perfect drill for order）であった。「書き取り」の時間には、「注意（Attention）」、「スレートを取れ（Take Slates）」、「スレートを拭け（Clean Slates）」、「手を組め（Hands Fixed）」、「鉛筆を取れ（Take Pencils）」などの教師の号令に即して授業が進められ、生徒には迅速で正確な規律ある行動が求められたからである。

この「書き取り」の時間における規律の訓練について、1850年の公立学校協会の「マニュアル」では、「生徒の注意を呼び起こし、知的活動を活発にし、眠っているエネルギーを効果的に発現させる」⁽²⁵⁾と高く評価している。

(3) 算術

次に、「算術」の教授方法はどうかであったか。「算術」のクラス分けと進級は、「読み方」とは全く別に行なわれた。ニューヨーク市公立学校協会の年報によると、1848年までのランカスター・スクールでは「読み方」のクラスは9クラス、「算術」のクラスは次の8クラスに分けられていた。すなわち、第1クラスと第2クラスは足し算・引き算、第3クラスでは掛け算・割り算、第4クラスでは加減乗除の混合、第5クラスでは約分、第6クラスでは比例算、第7クラスでは第6クラスまでの復習と練習、第8クラスでは応用問題を習得するよう、クラス分けがな

されていた⁽²⁶⁾。

たとえば足し算では、生徒はモニターが読み上げた数字を足し算してその答えを石盤に書き、それをモニターがチェックするという教育方法が用いられた。「読み方」の授業同様、首席の生徒が答えを間違えると、次席の生徒が答え、正答した者がそのクラスの首席になるという仕組みであった。この方法は、生徒の注意を喚起し、算術への意欲を駆り立てたようである。1850年に至ってもモニターが算術を教えていたが、それは校長の監督下においてのみ許されるように変わっていた⁽²⁷⁾。

5. ランカスター・システムの変容の要因

先述のように、ニューヨーク市においてランカスター・システムは、1806年にニューヨーク市無償学校協会が最初のランカスター・スクールを設立してから1853年に市の教育委員会が公立学校を管理するようになるまでの約50年間、ニューヨーク市の公的な学校教育システムであり続けた。このようにニューヨーク市のランカスター・システムが長命であったのは、やはりニューヨーク市無償（公立）学校協会の強い支持によって、公立学校教育制度の中に組み込まれたことに負うところが大きいとされる⁽²⁸⁾。

ニューヨーク市公立学校協会は、ランカスター・システムが経済的であったため、決してそのシステムに不信感を抱くことはなかったが、時代状況の変化によってしだいにランカスター・システムの支持を弱めざるを得なくなった。ここでいう時代状況の変化とは、たとえば、11歳以上の生徒が学校に留まることがほとんどなくなり、モニターを確保できなくなった事態が挙げられる。この背景には、生徒が11歳以上になればモニターよりも収入の多い職業に就けるという事実を、親たちが認識し始めたという社会現実があった⁽²⁹⁾。

また先述のように、1830年代以降、ニューヨーク市のランカスター・スクールでは、補助教員が採用され、モニターの役割は削減され

ていった。これは、1833年に公立学校協会がカリキュラムを改定し、天文学、代数学、幾何学なども教科目に加えたのに伴い、より高度な教育内容を教授できる補助教員を採用する必要性が高まったことによるものであった⁽³⁰⁾。とはいえ、ランカスター・スクールの形式的な規律は受け継がれ、保持されたようである⁽³¹⁾。

ランカスター・システムがその後のニューヨーク市の教育に提供した有効な遺産としては、このような組織化された等級編成や進級制、秩序維持のシステムその他、教員養成の先駆けとなった点、さらには、「読み方」、「綴り方」、「書き方」などが一つの協会が運営する複数の学校で同じ様に教授された点、体罰に頼らず、生徒の道徳心を鼓舞することに重点が置かれた点などが挙げられる⁽³²⁾。

Ⅲ. 19世紀後半のニューヨーク市における一斉教授法の成立過程

本節では、ニューヨーク市において、その後、どのように等級制学校が整備され、等級制の一斉教授法が成立していったのかについて、①校舎・教室、②等級編成・小学教則の変容に焦点をあてて考察を進める。

1. 校舎・教室の変容

まず、ニューヨーク市で等級制の一斉教授法が成立する過程において、校舎や教室がどのように変容していったのか、について考察する。

ニューヨーク市では、1842年に教育委員会が設置され、その結果、公立学校協会の独占的地位は崩されていった⁽³³⁾。それから11年後の1853年に公立学校協会が市の教育委員会に統合されると、教育委員会は複数の教室から成る校舎を一般的な形態にしていった。こうして市内では、それまでのランカスター・スクールの校舎が次々に改築、あるいは新築された。このうち5校は学校教育の目的にそぐわないとして廃校とされ、32校が改築、29校が新築された⁽³⁴⁾。ランカスター・スクールでは、一つの大教室と2、3の復唱用の教室が設置されていただけであったが、新校舎では、一教師一等級一教室を目指して多数の教室が設

置された。改築の場合には、それまでランカスター・システムで用いられていた大教室はカーテンや可動式のドアで区切られ、等級ごとの教室が作られた。ランカスター・システムの特徴であった大教室は、新校舎では集会用ホールとして受け継がれるようになった⁽³⁵⁾。

ランカスター・スクールは、約 1000 人を収容できたが、新築された等級制学校では、その倍の約 2000 人が収容できるとされた。したがって、一つの大教室を区切って複数の教室を設置した新校舎の方が、より経済的であったといえる⁽³⁶⁾。

図 4 は、当時新築された 21 学区第 16 プライマリースクール (Primary School) の 2 階と 3 階の見取り図である。各階に 2 つの職員室と 6 つの教室が設置されている。この校舎には、約 1200 人～1500 人の生徒が収容できたようである⁽³⁷⁾。ニューヨーク市では、1853 年以降、こうした等級制学校の校舎が次々と建てられ、定着していったのであった。

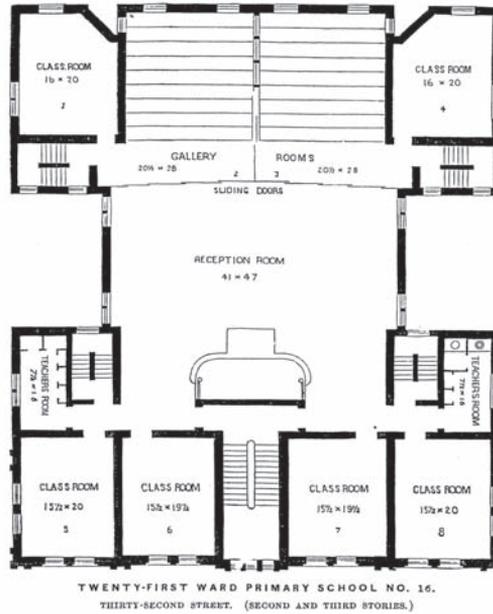


図4 1868年当時のニューヨーク市公立小学校校舎の見取り図

(出典：Boese, Thomas, *Public Education in the City of New York: Its History, Condition, and Statistics, An Official Report to the Board of Education*, New York, Happer & Brothers, Publishers, 1869.)

それから15年後の1868年には、市内のプライマリースクール (Primary School) は92校、グラマースクール (Grammar School) は97校、高校 (High School) は1校、師範学校 (Normal School) は2校となり、プライマリースクールから師範学校まで等級制が採用されるようになった。したがって、この時期には等級制の学校教育体系が確立されていたといえよう⁽³⁸⁾。

2. 等級編成・小学教則の変容

1850年代には、「ランカスター・システムは次第にニューヨーク市において拒否されるようになり、このランカスター・システムの柔軟なクラス分けと進級のシステムは現行のクラス編成に取って代わられた」⁽³⁹⁾とされる。それでは、このようにランカスター・システムが拒否され、等級制学校が成立する過程において、等級編成や小学教則は果たしてどのように継承され、一斉教授法にかなうよう、いかに変容したのだろうか。以下、考察を進めたい。

1853年のニューヨーク市の初等教育課程は、下等小学（Primary Department）6級と上等小学（Upper Department）6級（女子は7級）から構成されていた。同年に市の教育委員会が定めた下等小学の小学教則は、以下の通りであった。

- 第1級 アルファベットのカード
- 第2級 単音節語の綴り方と読み方
- 第3級 ケイの（Kay's）リーダー第2巻、サンダースの（Sander's）綴り方、加算の表
- 第4級 同上、加算の運算
- 第5級 ウェブの（Webb's）のリーダー第2巻、スワンの（Swan's）綴り方、掛け算の運算
- 第6級 ウェブのリーダー第3巻、ピアソンの（Pierson's）綴り方と表、モンティース（Monteith's）の地理書、割り算の運算⁽⁴⁰⁾

このように、1853年の教則では等級制が採用されているものの、読み方、綴り方、算術、地理という非常に簡素な教科構成であった。教育内容も主に教科書に即して基礎的な内容しか定められていないことが窺える。ランカスター・システムでは、読み方、算術のように教科ごとに等級編成がなされていたが、1853年の教則では、教科ごとに等級を分

けず、一つの等級で全教科を一斉に教授するよう編成されている点特徴的である。

それから13年後の1868年ニューヨーク市の初等教育機関は、プライマリースクール（Primary School）とグラマースクール（Grammar School）から成り、それぞれ5級の等級編成となった。同年に定められたプライマリースクールの教則の科目構成は次の通りであった。

第5級

アルファベットのクラス：読み方、数字の図、算用数字、実物教授
初歩読本のクラス：読み方、綴り方、数字の図、算用数字、ローマ数字、実物教授、暗算、道徳と作法

第3級 読み方、綴り方、句読法、ローマ数字、算術、暗算、掛け算表、実物教授、道徳と作法

第2級 読み方、綴り方と語義、句読法、ローマ数字、算術、暗算、掛け算表、図画、実物教授、道徳と作法

第1級 読み方、綴り方と語義、算術、暗算、地理、図画、実物教授、道徳と作法、唱歌⁽⁴¹⁾

この1868年の教則を1853年の教則と比べると、1853年の教則は、教科書に即して定められていたが、1868年の教則は、授業が教科書によって規定されすぎないように、「読み方」以外は教科書を挙げず、教授の内容のみが示されている。すなわち、教科書は補助的役割を果たすものの、教師の行動や授業を抑制するものと認識されていたようである。そこでは、教科書中心の教授を廃し、教師との問答や会話に多くの時間を費やすことによって、生徒がその教科についてどのような質問にも答えられるよう、各教科内容を深く理解させることが求められていた⁽⁴²⁾。

おわりに

以上のように本稿では、まず、19世紀前半のニューヨーク市のラン

カスター・スクールにおけるモニター式教授の基本は、個別教授の域を出ていなかったと考えられることを指摘した。その上で、19世紀後半において、ランカスター・システムから一等級一教師の等級制一斉教授法への移行が図られた要因として、主に次の3点が挙げられることを明らかにした。

すなわち、第一に、モニターよりも高度な教育内容を教授できる有給の補助教員を採用する必要性が高まったこと。第二に、児童が11歳以上になればモニターよりも収入の多い職業に就けるといふ事実を、親たちが認識し始めたことによるモニター不足の問題。第三に、一つの大教室を区切って複数の教室を設置した等級制一斉教授法にかなう校舎の方が、ランカスター・スクールの約2倍の生徒を収容できたことから、経済性、効率性を追求する教育委員会によって校舎の新築、改築が推し進められたことなどが挙げられる。

すなわち、ニューヨーク市においても、ボルティモア市と同様、ランカスター・システムのモニター式教授の衰退には、等級制一斉教授法の登場が関わっていたと考えられる。

ニューヨーク市では、1930年代以降、児童の暦年齢を基準として学級を編成する年齢主義による学年制が普及するようになる⁽⁴³⁾。こうしたニューヨーク市における学年制の一斉教授法の成立過程については、今後の課題としたい。

註

- (1) 助教制度、すなわちモニトリアル・システムは、ベル (Bell, Andrew) とランカスター (Lancaster, Joseph) によって19世紀イギリスの学校教育に導入された。モニトリアル・システムとは、一人の校長が年長で能力のある生徒をモニターとして無給で用い、モニターがそれぞれ10～20人程度の生徒を教えることにより、最少の費用で数百人もの生徒を教育するシステムを指す。

- このシステムのもとでは、校長はあらかじめ教育すべき内容と教育方法をモニターに教え、自分は教室全体の進行を監督した。
- (2) 稲垣忠彦『増補版明治期教授理論史研究——公教育教授定型の形成——』評論社、1995年、438頁。箱石泰和「一斉教授」細谷俊夫編『教育学大事典』第1巻、第一法規、87頁。
 - (3) モニトリアル・システムのうち、アメリカに普及したのはランカスターのシステムで、ランカスター・システムと呼ばれる。
 - (4) Hogan, D., *The Market Revolution and Disciplinary Power: Joseph Lancaster and the Psychology of the Early Classroom System*, *History of Education Quarterly*, vol. 29, no. 3, 1989, p.386.
 - (5) 安川哲夫「『一斉教授の情況』か？——モニトリアル・システム再考——」科研費研究成果報告書『近代世界における教育の国際交流の歴史的成立過程に関する基礎研究』1984年。
 - (6) Johnson, W. R., “Chanting Choristers”: Simultaneous Recitation in Baltimore’s Nineteenth-Century Primary schools, *History of Education Quarterly*, vol. 34, no. 1, 1994.
 - (7) 拙稿「ミズーリ州セントルイス市における一斉教授法の成立過程——等級制学校への移行と School Tactics の採用を中心に——」『アメリカ教育学会紀要』第14号、2003年。
 - (8) Kaestle, Carl F., *Joseph Lancaster and the Monitorial Movement*, Teachers College Press, Columbia University, 1973, p.34.
 - (9) 永塚史孝「19世紀前半ニューヨーク市における公立学校設立過程」『日本大学文理学部人文科学研究所研究紀要』第51号、1996年、134頁。
 - (10) Kaestle, Carl F., *op. cit.*, p.35.
 - (11) Ravitch, Diane, *The Great School Wars New York City, 1805-1973*, New York, Basic Books, 1974, pp.12-13.

- (12) 青木薫『アメリカの教育思想と教育行政』ぎょうせい、1979年、53頁。
- (13) Kaestle, Carl F., *op. cit.*, p.36.
- (14) *Ibid.*
- (15) Reigart, John Franklin, *The Lancasterian System of Instruction in the Schools of New of New York City*, Teachers College, Columbia University, New York City, 1916, p.17.
- (16) Reigart, John Franklin, *op. cit.*, pp.25-29.
- (17) *Ibid.*, p.24.
- (18) Public School Society of New York, *Manual of the Lancasterian system, of teaching, reading, writing, arithmetic, and needle-work, as practiced in the schools of the Free-society, of New York*, New York, The Society, 1820, pp.46-58.
- (19) Public School Society of New York, *A Manual of the system of discipline & instruction for the schools of the Public School Society of New York*, New York, Egbert&King, Printers, 1850, pp.68-75.
- (20) Reigart, John Franklin, *op. cit.*, p.32.
- (21) *Ibid.*, p.34.
- (22) Public School Society of New York, *op. cit.*, 1820, p.20.
- (23) *Ibid.*
- (24) Reigart, John Franklin, *op. cit.*, p.44.
- (25) Public School Society of New York, *op. cit.*, 1850, pp.25-26.
- (26) Reigart, John Franklin, *op. cit.*, p.53.
- (27) *Ibid.*, p.54.
- (28) *Ibid.*, p.97.
- (29) *Ibid.*
- (30) *Ibid.*, p.31.
- (31) *Ibid.*, p.97.

- (32) *Ibid.*, p.99.
- (33) 永塚前掲論文、140 頁。
- (34) Boese, Thomas, *Public Education in the City of New York: Its History, Condition, and Statistics, An Official Report to the Board of Education*, New York, Happer & Brothers, Publishers, 1869, p.157.
- (35) Reigart, John Franklin, *op. cit.*, pp.24-25.
- (36) Boese, Thomas, *op. cit.*, pp.158-159.
- (37) *Ibid.*, p.162.
- (38) *Ibid.*, p.132.
- (39) *Ibid.*
- (40) Palmer, A. Emerson, *The New York Public School: Being A History of Free Education in the City of New York*, New York, The Macmillan Company, 1905, p.147.
- (41) Boese, Thomas, *op. cit.*, pp.134-135. なお、第4級の教育内容については記述がないため、不明である。
- (42) *Ibid.*, pp.136-137.
- (43) 宮本健市郎『アメリカ進歩主義教授理論の形成過程』東信堂、2005年、143頁。